

1-1 『2007年度 学生部白書』に寄せて

学生センター長 宮崎 伸光

数多くの方々のご努力を得て『2007年度 学生部白書』が完成いたしました。私は、みなさんのお手許にこの白書をお届けすることができることをたいへん嬉しく思います。

実はこの白書の題名にある「学生部」は2007年度末をもって廃止され、「学生センター」へと組織が改められました。そこで、2007年度版の本書は、最終号ということになります。

私は、2008年度から学生センター長を拝命することになりました。指名の打診を受けたときには、かような大役には役者不足も甚だしいと思いました。ただ、それまでに学生生活委員と副学生部長を1年ずつ経験しており、私なりに学生生活の支援についての考えもありましたので、お引き受けするか否か、かなり迷いました。もともと、3月中旬になっての総長選挙結果を承けての指名人事ですから、迷っている時間に余裕はありませんでした。本学において学生の生活環境を守るためには、残念ながら今日なお組織的な業務妨害に対峙する「特殊任務」も避けられません。いや、その比重が重いからこそ、学生生活の支援策についてもさまざまな側面において深刻な影響が現れてきました。すべてを飲み込んだうえで、あえて受諾するべきか否か、迷いに迷いました。さりながら、この迷いを吹っ切ったのは、20数年ぶりに紐解いたある文庫本でした。20歳にして自死を選ばざるを得なかった学生活動家の遺稿集ですが、そこには時代背景を超越した青年期の悩みと可能性が溢れていました。この私に何がどのようにできるかどうか、今は皆目見当もつきませんが、与えられた3年間の任期を精一杯努めていきたいと思えます。

さて、本書は題名が示すとおり、2007年度の学生部がどのような活動（仕事）をしたのかをとりまとめ、報告するものです。私が着任する前の活動ですから、私も今お読みいただいている大勢の読者と同様の立場で（ただ、少しだけみなさんより先に）読むことになります。そして、ざっ

と目次を一瞥しただけでも、いろいろと感じるところがあります。

およそ学生生活の支援というからには、何らかの事情で経済的に困窮した意欲・能力ある学生を支援すること、すなわち奨学金の制度は不可欠でしょう。また、経済問題に限らず諸事万端にわたる学生相談も欠かせません。正課外に学生が行う諸活動の支援も、学生生活といえは正課に劣らないぐらい重要でしょう。さらに、学生部が企画し実施するさまざまなプログラムがあります。とくに文部科学省に採択された学生支援GPについては、きわめて多彩かつ盛りだくさんであったことがおわかりいただけることと思います。

こうして見ますと、学生支援の活動にはこれで十分という限界が存在しないことがわかります。どれほど多彩な企画を数多く実施したとしても、なお満足がいけないかもしれません。また、一つひとつのプログラムを終えたときも、なお反省点を抱え満足できないかもしれません。それは、真摯に取り組みれば取り組むほど遠退いていく、あたかも永遠の目標地点なのかもしれません。

しかしながら、本書に報告されている活動の多くは、幸いなことに学生諸君の好評を得ることができました。学生参加プロジェクトは、もちろん参加学生数も気にならないといえは嘘になりますが、参加した学生に笑顔が見られるかどうか、スタッフはいわば一呼吸おいた後に満足感を味わうことになります。まさに数ではなく質が問われます。

私は、上で「2007年度版の本書は、最終号」と記しました。しかしながら、2008年度からは新装なった学生センターとして、これまで学生部が果たしてきた学生生活を支援する諸活動の継承発展に努めていきます。私は、本書に学び、新しい組織で何をするべきか、また何ができるか等を熟考し実践したいと思えます。